Lespedeza juncea var. serpens f. **hirta** (Hiyama) Ohashi, comb. nov.

L. serpens Nakai f. *hirta* Hiyama in J. Jap. Bot. **28**: 217 (1953).

Lespedeza juncea var. *subsessilis* Miq. はハイメドハギではなく，メドハギである。ケハイメドハギ f. *hirta* はハイメドハギの一形で，豆果の両面に伏した粗毛を生ずるものである。

4. ヤエヤマハギカズラ

Galactia tashiroi Maxim. f. **yaeyamensis** (Ohwi) Ohashi, comb. nov.

G. tashiroi var. *yaeyamensis* Ohwi in J. Jap. Bot. **13**: 337 (1937).

5. シロナタマメ

Canavalia gladiata (Jacq.) DC. f. **alba** (Makino) Ohashi, comb. nov.

C. ensiformis (L.) DC. var. *alba* Makino in Iinuma, Somoku Dzusetsu **3**: 952 (1912). *C. gladiata* (Jacq.) DC. var. *alba* (Makino) Hisauchi in J. Jap. Bot. **13**: 392 (1937).

6. ツルマメ

Glycine max (L.) Merr. subsp. **soja** (Sieb. & Zucc.) Ohashi, comb. nov.

G. soja Sieb. & Zucc. in Abh. Akad. Muench. IV. **2**: 119 (1845).

ダイズとツルマメはダイズ属の中で最も近縁であり，相互に交配が可能で，遺伝的には同一種と考えることができるであろう。起源的にもダイズはツルマメから分化したと考えられるものであるが（海妻・喜多村：ダイズの起源と分化 育種学最近の進歩第21集，1980)，形態的には次のように異なっており，亜種として区別することがよいと考える。すなわち，ダイズはツルマメに比べると，茎が直立し，褐色の開出長毛があり，小葉がツルマメよりも大きくて広卵形であり，小苞の長さが 2.5～3 mm（ツルマメで 1～2 mm）あり，豆果の長さが 3～7.5 cm あり，種子の大きさが長軸 6～11 mm，短軸 5～8 mm である（ツルマメでは長軸約 4.5 mm，短軸約 3 mm)。

（東北大学理学部生物学教室）

□前川文夫：**植物の名前の話** 164+8 pp. 1981. 八坂書房 ¥1,800. 中村 浩：**植物名の由来** 253 pp. 1980. 東京書籍株式会社 ¥980. 植物和名についてかなりまとまった上記の2書が出版された。前川博士は「この語原考は自信のあるものだが，さらにこれを越えるものがあれば，それを受け入れるにやぶさかでない」と将来の発展を希み，「糞尿博士」こと中村博士は古文献，本草書，歌集，辞典の書籍の山に埋れて「白髪頭をかかえてうずくまって，植物名の語源探索に熱中して暮しているが，まだまだ根気は失われていない」と意欲充分であった。残念ながら中村博士は本書出版を前にして亡くなられた。上記二書は植物学者の植物語源考だから，国語学者等のそれとは異なり，植物そのものの観察からの視点を持つことがわかる。マツムシソウはマツムシの鳴いてい

るあたりで美しい花を開き，似つかわしい優雅な名と私は思っていたが，中村博士によると，たたくとマツムシのような音を出す伏鉦がマツムシとよばれ，この草の花序がこの伏鉦にそっくりなのでマツムシソウとよばれるというので図を見ると納得できる。またホタルブクロは子供がこの花にホタルを入れて遊ぶと私は思っていたが「火垂」すなわち，ちょうちんからきたとされて，なるほどと思う。マツムシという虫から鉦のマツムシ，その形からマツムシソウにつながるのだし，ほたる（ちょうちん）が昆虫のホタルと植物のホタルブクロへと別れてくる関連がおもしろい。田中忠夫氏がその「植物語源考」で中国文字学の上から中国語による名を同義または類義の他の中国語の発音で置きかえたものが国語の名となったことを主張，アケビの中国語の丁翁から丁は当にあたりアク—アケとなる。翁は老—衰—微—ビであるから丁翁が国語でアケビとなるという。前川博士は巻頭の「植物の語源の探究法について」の章でこれを引用し「このように自由奔放，変化自在の転換ができるならば，たいていの語源は自分の好むところに導くことができよう」と批判する。アケビは多くの人が考え，前川博士もいわれるように「開け実」からでたとすることが自然であろう。開けつび説（畔田伴存，牧野富太郎）は考えすぎであろう。しかし田中説を排除する前川博士がヤマモモは中国名の楊梅（ヤンメイ）からヤンメイモモ→ヤマモモとなったとされるのは田中氏の発想に近いのではないかと思われる。昔はモモは今のヤマモモを意味した。そこにおいしい大きなモモ（桃）が入ってきた。これは栽培種で，いわば里のモモである。これと区別するため今までいっていたモモを山に生える意味でヤマモモといったとするのが自然の考えと思われるのだが。前川博士はモモの話はこの書に何度も出てくるように「中国から楊梅の名称と利用法とが輸入されたが名がない。そこで楊梅の名をそのまま採ってヤンメイという丸い実の意味でヤンメイモモ→ヤマモモとなって各地で通用するに至ったのではないかと考えるのである」(p. 122) という。しかしヤマモモがおいしい果実であることぐらいは中国人に教えられなくても古代人は知っていたと思いたいのである。馬酔木というアセビの漢語はアセビに似た発音 ma-sei-mu から中国人が作ったと前川博士が言われるのも他に何か証拠がないとにわかに信じ難い。まことに著者もいうように名の由来はむつかしい。難かしいから返って楽しいことでもある。この両書を読めば，両氏の秀れた発想力の気炎が随所にでていて白井光太郎「和名考」や牧野富太郎の諸書以来の和名を論ずる本として注目すべきものであることがわかる。歴史的には植物名の変遷をさぐり，現時点では方言の蒐集につとめた体系的の研究が今後に待たれ，そこから植物和名学とでもよばれるものが樹立されることを期待したい。　　（木村陽二郎）